法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

# 特集「日本研究とトランスナショナリズム」（第4回アルザス・ワークショップ/2021年度国際新世代ワークショップ）：特集「日本研究とトランスナショナリズム」に寄せて

髙田, 圭 / TAKATA, Kei

(出版者 / Publisher)
法政大学国際日本学研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学
(巻 / Volume)
20
(開始ページ / Start Page)
131
(終了ページ / End Page)
137
(発行年 / Year)
2023-02-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026765

# 特集「日本研究とトランスナショナリズム」に寄せて

髙　田　　圭

法政大学・国際日本学研究所は、2005年以来ヨーロッパ日本研究所（CEEJA）との共同ワークショップをほぼ毎年開催してきた。近年は、「国際日本研究」コンソーシアムとの連携も加わり、若手の研究報告を主体とするワークショップへと発展している。今年度、第4回目を迎えたアルザス・新世代ワークショップは、「日本研究とトランスナショナリズム」というテーマのもと、対面とオンラインというハイフレックスの形態で、フランス・コルマールのCEEJAをベースに開催された。1日目は「トランスナショナルな文化」、2日目は「日本と西洋／東洋のつながり」、そして3日目に「トランスナショナリズムと境界」という小テーマを設定し、3日間にわたり合計12名による報告がなされた。基調講演者として、酒井直樹氏（コーネル大学）、クラウディア・デーリヒ氏（フンボルト大学）、サンドラ・シャール氏（ストラスブール大学）の3名を米独仏から迎え、また公募で集まった9名の報告者は、ドイツ、イギリス、フランス、スイス、イタリア、そして日本の研究機関に所属するキャリアの若い（early career）研究者たちであった。これら報告者に加えて、CEEJA、ストラスブール大学、東アジア文明研究センター、国際日本文化研究センター、名城大学、法政大学からコメンテーターが集い、白熱した議論が展開された。

「日本研究とトランスナショナリズム」というテーマには大きく二つの狙いがあった。一つは、地域研究という領域とトランスナショナリズムとの関係を探るメタな議論があり、もう一つは、個別具体的な日本のトランスナショナリズムの実証的な研究の報告である。国境を越えた現象から世界を捉えな

おす試みは、「グローバル・ターン（global turn）」という言葉も生まれ、特に2000年代から盛んに議論されてきた。それは、この新たな視点に基づく多くの実証研究を生んだだけでなく、より広く既存の知の枠組みを突き崩し、われわれの認識論的な転換を迫るアプローチであるとも見做されてきた。社会学の領域では、例えば「方法論的ナショナリズム（methodological nationalism）」という言葉で、それまでの社会学的な知が、器としての国民国家を基に組み立てられてきたという批判が展開され、国を超える視座で社会を捉える必要性が訴えられた。では、この「グローバル・ターン」が日本研究を含めたエリア・スタディーズにどのようなインパクトをもたらすのだろうか。国民国家それ自体の特徴とそこに住む人々を研究対象とするエリア・スタディーズにとってこうした知の転換は、ある意味では社会学や文学といったディシプリンよりも一層クリティカルなものであり、地域研究という領域のアイデンティティを根底から揺るがすようにも見える。果たしてトランスナショナリズムのアプローチは、どのように日本研究を転換させうるのか、本ワークショップを通じてともに理解を深めていきたいと考えた。

そこで、こうした問題について有益な知見を提供してくれるだろう第一線の研究者に基調講演を依頼した。以前から本ワークショップにご協力いただいているストラスブール大学のサンドラ・シャール（Sandra Schaal）氏には、ワークショップのテーマとは別に、2020年に刊行された著書『「女工哀史」を再考する：失われた女性の声を求めて』の出版を記念した報告を依頼した。本報告では、これまでの「女工哀史」イメージを覆す、主体性を持った女性たちの生き生きとした物語が示された。他方、酒井直樹（Naoki Sakai）氏とクラウディア・デーリヒ（Claudia Derichs）氏は近年それぞれ米国とドイツでトランスナショナリズムとエリア・スタディーズの問題について論じている研究者だ。特に酒井氏は、トランスナショナリズムがエリア・スタディーズを根底から突き崩すような革新性があることを主張する重要な論考を発表してきた。本ワークショップにおいても、この延長線上の議論として「インターナショナリティとトランスナショナリティ－翻訳とエリア・スタディーズ（Internationality and Transantionality: Translation and Area

Studies)」と題した講演がなされた。これまでの米国で発展したエリア・スタディーズは、領土と境界が明確な国民国家を前提とした、またパクス・アメリカーナをベースとする世界秩序と親和性の高い「インターナショナリティ」に基づいたものであった。それに対して、国民国家の領土化を無効化するような「トランスナショナリティ」の視点からエリア・スタディーズを再考していくことの必要性を訴える刺激的な報告であった。クラウディア・デーリヒ氏は、こうした認識論的な議論とはまた異なる方法論的な問題としてトランスナショナルな視座の有用性を説いた。ローカル間の相互行為、国境を越えたネットワーク、またリージョンを越えたつながりなど異なるレベルで「トランス」概念を捉えること、また「アジア」という概念からアジアの各地域を捉えなおすこと、西洋が非西洋に向けた眼差しを逆に西洋に当てはめる試みなど様々な越境的なアプローチが紹介され、こうした方法で日本やアジアを捉えることの革新性と西洋中心主義を乗り超える可能性が示された。ヨーロッパからの非西洋的な知に対する新たな眼差しと評価が垣間見れる講演であった。

こうしたように本ワークショップでは、3本もの有意義な基調講演がなされ、参加者は最先端のトランスナショナリズムの概念、また方法論に触れた。しかし他方で、今回のテーマ設定の背後には、トランスナショナリズムと日本研究に関わるもう一つの問題意識があった。それは、国境を超えながらも残る、「国」のようなものをいったいどのように捉えれば良いのか。はたまた、グローバル化の時代でも現存する国家というものをトランスナショナリズムの方法論はどのように考えるべきかというものである。（過去も現在も）世界には国民国家を超える現象が溢れており、また国民国家の相対的な影響力の低下が指摘されて久しい。それでも、国民国家がボーダーを管理するアクターとしてトランスナショナリズムのあり方に強い影響を与え、また制度としての国家だけでなく、国民のあり方もその国、地域のトランスナショナリズムのかたちを規定しているようにも見える。トランスナショナリズムをある国からある国への移動とその受け入れの問題であるとすれば、やはり移動の現象だけを追うのではなく、移動を促進または制限するナショナル（また

はローカルな）な磁場のようなものを含めて理解する必要があるのではないだろうか。要するに、国境を越える現象に着目する意義と近代国民国家の概念的な乗り超えを認めた上で、それでも残る国というもの、そしてそれぞれの国の特徴によって影響を受ける各国のトランスナショナリズムのあり方を探っていくことが重要であろう。

こうした密かな問いに関しては、本ワークショップの二つ目の狙いである、トランスナショナリズムの実証研究が多くの示唆を与えてくれた。以下の通り公募で参加した９名による報告はすべて、国または民族を越える現象を「日本」を軸に様々な角度から明らかにする興味深い発表であった。

- Yijie Chen / 陳藝婕（総合研究大学院大学［日本］）
  「高島北海『写山要訣』の中国受容」
- Aki Yoshida / 吉田安岐（フランス国立東洋言語文化研究院［フランス］）
  「文学におけるトランスナショナリズムとその受容―在コリアン文学を一例として―」
- Maria Carlotta Avanzi / アヴァンツイ・マリア・カルロッタ（秋田県立大学［日本］）
  “Religions Beyond Borders – Buddhism and its Impact on Ancient Japanese Art”
- Pia Maria Jolliffe / ジョリフ・ピア・マリア（オックスフォード大学［イギリス］）
  “Transnational Relations and Young People’s Intellectual Lives: The Tenshō Embassy 1582-1590”
- Danila Kashkin / カシキン・ダニラ（ジュネーブ大学［スイス］）
  “They Came from beyond the Sea: Castaways and the Transnational Cultural Exchange between Japan and the West”
- David Malitz / マリツ・ダーヴィト（ドイツ日本研究所［日本］）
  “Japan in Southeast Asia/Southeast Asia in Japan: Transnational Perspectives from Thailand and Japan”

- Takahiro Yamamoto / 山本敬洋（ハイデルベルク大学［ドイツ］）
  “Demarcating Japan: A Microhistorical Approach”
- Michiyo Koga / 古賀通予（法政大学［日本］）
  「日本語は普遍を表明できないか」
- Chiara Rita Napolitano / ナポリターナ・キアラ・リタ（ナポリ大学［イタリア］）
  “Rewriting Tradition: An Analysis of the Influence of Transnational Cultural Flows on Japanese Traditional Townhouses”

分野としては主に歴史学、文化研究、思想史からの報告であり、時代も対象も多様であったものの、まとめるとすれば以下の四つのテーマに分類できる。
① 世界文明のなかの日本の地政学的な位置（Maria Carlotta Avanzi, Chiara Rita Napolitano）
② 西洋と東洋のあいだのメディエーターという日本の役割（Yijie Chen, David Malitz）
③ 日本人のトランスナショナルな実践と国境管理（Takahiro Yamamoto, Danila Kashkin, Pia Maria Jolliffe）
④「他者」との出会いと日本の民族観やアイデンティティ（Aki Yoshida, Michiyo Koga）

こうした数多くの興味深い報告がなされたため、今回、特にワークショップの狙いに合致し、優れた報告を「第4回・アルザス新世代ワークショップの特集」として『国際日本学』第20号に掲載する運びとなった。ダニラ・カシキン氏の「異人が来たのは海の彼方　―江戸時代における漂流民の国際文化交流―」では、江戸期の漂流民という特異な存在に着目し、漂流民が生まれた背景や流れ着いたロシアやアメリカ、そして帰国後の日本での扱いなど彼らの意図しないトランスナショナルな移動の実態に迫っている。山本敬洋氏による「縁取られる日本 ―近代日本史の周縁から―」が主題にしたのは、近代日本において国家の領土の外縁がどのように形成されたのかという境界の問題である。山本氏の論考は、ロシアとの境界領域を移動するトランスナ

ショナルな人々が日本の国境画定の交渉という国民国家のプロジェクトに巻き込まれていく歴史を描いた。これらの近世、近代初期の歴史に対して、残りの二つの論文は、第二次大戦後のトランスナショナルな実践に着目する。古賀通予氏の「森有正の渡仏に見る西欧と日本」は、戦後に国境を越える移動の自由を獲得した知識人のフランス留学がもたらした日本観の形成に追った。本稿は、森有正がパリでの生活を通じて日本人には西洋的な意味での「経験」、「個人」、「社会」すらないという気づきを得るその「恐怖」の知的奇跡を丹念に分析した。そして「文学におけるトランスナショナリズムとその受容在日朝鮮人文学を一例として」において吉田安岐氏が問題にしたのは、文学におけるナショナルとトランスナショナルの相剋である。在日朝鮮人作家の作品に表れるトランスナショナルな性格を分析し、そうした作品の「日本文学」からの排除と包摂を論じた。これらの論考が扱う時代や対象（漁民、翻訳者、医師、学者、文学者等）は異なるものの、共通して言えるのは、それぞれの論文のトランスナショナルな主人公たちは皆、周縁的な存在だと言うことである。境界を行き来する、または境界線上に位置する人々は、社会全体から見ればマージナルにならざるを得ないが、そうした存在を扱うことで「日本」の輪郭が浮かび上がってくることをこれらの論考は見事に証明している。

ワークショップでの報告や議論、そして今回掲載の論考からは当初の狙いを超えて、ワークショップの意義を再確認するような興味深く、重要な論点が提示された。これまでのワークショップでは、欧州と日本からの研究者の交流が主であったが、今回は、主催者の一人である坪井秀人氏の招聘によって米国から酒井直樹氏の参加が実った。日欧米の、また世代の異なる日本研究者が、三日間にわたって一堂に会することで、異なる日本や世界に対する眼差し、また日本研究／地域研究の文化的な差異も浮き彫りになった。元来、欧州の日本研究と北米の日本研究は（もちろん、日本の日本研究も）、異なる知的伝統の中で育まれてきた。ただし、地域研究を含めた人文社会科学のグローバルなフィールドが立ち上がってくることで、そうした各々のアカデミック文化も、問い直され、変容を迫られてきている。今回のワークショッ

プでは、真正面からトランスナショナリズムについて論じた。また参加者についても、実際に国境を越えた移動、オンラインでのスクリーンを通じた参加と多様なトランスナショナリズムが実践されたことで、最終日の全体統括を含めて時に緊張感を伴う刺激的な議論へと発展した。日本研究も今後ますますグローバルなフィールドでの交流が進んでいくことは避けられない。世界各地の研究者が、アルザスという境界（boundary）に翻弄された歴史を有する場所に数日にわたって集う本ワークショップは、今後も日本を巡るトランスナショナルな対話の実験場として、知的貢献を続けていくことが期待される。